

# 新普通科系高校創設に向けての「中間まとめ」

平成28年5月

京都市立新設高校創設プロジェクト

## 目 次

1	新普通科系高校の創設に向けて	…	1
2	目指す生徒像・学校の基本コンセプトについて	…	3
3	教育課程や教育活動の具体化について	…	4
	（1）京都の都市特性を最大限に生かした教育活動の在り方		
	（2）魅力あふれる教育課程の編成と授業の在り方		
	（3）生徒の主体性を引き出す教育活動の在り方		
	（4）小・中学校等や地域と連携した教育活動の在り方		
	（5）チームとして協働する学校の在り方		
4	施設・設備について	…	7
	（1）生徒が主体的・能動的に学びあう施設・設備		
	（2）「魅せる高校」のための施設・設備		
	（3）地域が輝く施設・設備		
5	学校規模・設置学科について	…	9
	（1）学校規模について		
	（2）設置学科について		
<参考資料>			
1	京都市立洛陽工業高校跡地における「新しい普通科系高校の創設に関する基本方針」	…	1 1
2	京都市立新設高校創設プロジェクト名簿	…	1 3
3	これまでの検討経過	…	1 4
4	プロジェクト（有識者会議）等での主な意見	…	1 5
5	洛陽工業高校と塔南高校の施設状況等	…	1 7

## 1 新普通科系高校の創設に向けて

本市においては、これまでから常に時代の変化を見据え、生徒一人一人の個性の伸長と進路希望の実現を図るため、市立高校の各校が創意工夫を凝らした特色ある教育活動を展開してきた。平成28年4月には将来の日本の「ものづくり」「まちづくり」をリードする担い手の育成を目指して、洛陽工業高校と伏見工業高校を再編・統合した京都工学院高校が開校したところである。

これにより、平成29年度以降に活用が可能となる洛陽工業高校の跡地に関し、平成26年8月に洛陽工業高校同窓会である洛陽京工会から「洛陽工業高校の跡地は学校施設として活用して欲しい」旨の要望が、また同年11月には塔南高校の同窓会、PTA役員経験者などで組織されている塔南高校愛校会、塔南高校PTA、塔南高校の4団体から「立地、施設の老朽化や狭隘（きょうあい）な状況等の課題解決に向け、洛陽工業高校跡地へ塔南高校を移転させてほしい」旨の要望がそれぞれ教育長へ提出されている。

塔南高校は、生徒急増期にあった昭和38年、当初は中学校用として計画されていた施設を転用し、それまで普通科と工業科を併置していた洛陽高校、伏見高校両校の普通科生徒を受入れる形で全日制普通科単独校として開校した。以来、教職員の熱意ある取組によって、平成5年度には現役国公立大学合格者が74名（京都府下公立高校トップ）となるなど、教育界をはじめとする様々な分野で活躍する卒業生を数多く輩出してきた。

また、平成19年度には教師として求められる「知性」「志」「実践力」を高校段階から育成する全国初の教員養成系専門学科として「教育みらい科」が設置された。生徒たちは同じ志を持った仲間と将来を語り合いながら実践的な取組を通して切磋琢磨し、教師として必要な資質・能力の基礎を培っている。

一方、交通の利便性に課題があるほか、生徒一人当たりの校舎面積が市立高校で最も狭い状況であること、老朽化が進む中で建物全体の約7割（床面積比）が耐震補強を要するなど立地面や施設には様々な課題を抱えている。

こうした状況を早急に改善し、より充実した教育環境の下で最先端の高校教育を展開できるよう、現在の塔南高校を洛陽工業高校の跡地に移転・再編し、新しい普通科系高校（本「中間まとめ」では、「新普通科系高校」という）を創設する「京都市立洛陽工業高校跡地における『新

しい普通科系高校の創設に関する基本方針』(以下、「基本方針」という。)が平成27年6月に策定された。

この「基本方針」の具現化に向けて、教育委員会、中学校・高等学校校長会および塔南高校の管理職・教職員で構成する「京都市立新設高校創設プロジェクト」を平成27年7月に設置し、大学や産業界、保護者の方からもご意見をいただきながら、次代を担う「新普通科系高校」の教育内容や学校規模、施設・設備などの骨子について検討を進めてきた。

今後とも全国をリードする新普通科系高校の創設に向け、国での教育改革の方向性など時代の潮流を的確に捉えつつ、引き続き市民や保護者の皆様、大学、産業界から幅広く御意見をいただきながら、基本方針の一層の具体化を進めていく。

## 2 目指す生徒像・学校の基本コンセプトについて

「基本方針」において、新普通科系高校では日本が目指す科学技術イノベーション立国を見据えるとともに、塔南高校において様々な分野で活躍する生徒を育ててきた教育風土をしっかりと引き継ぎ、多様な分野で「社会に貢献する生徒の育成」を学校の最高目標としている。

また、その最高目標の実現に向け、学校教育と実社会とのつながりを重視した教育活動の下、「国際的な視野を持って主体的に社会に参画し、自立して社会生活を営むために必要な力」を育むことを教育活動の基軸として学校づくりを行うこととしている。

「基本方針」に示された「目指す生徒像」と「学校の基本コンセプト」は以下のとおりである。

### 目指す生徒像

- ① 自らの将来像を描き、その到達に至る道筋と達成すべき課題を明確にして、目標の実現に向けチャレンジし続ける生徒
- ② 在校生はもとより、小・中学生や地域の方々等、世代や立場を超えた人々とも積極的に交流し、他者と協働して活動できる力を培い、多様な価値観や生き方を学びながら、自己の成長につなげることができる生徒
- ③ 国際化や情報化の進展する社会において、地域や社会の課題を多角的にとらえる視野を育み、科学技術分野や教育分野をはじめとする多様な分野で社会に貢献する気概を持って、社会的課題の解決や新しい価値の創造に向けて行動し、社会の発展に寄与することのできる生徒

### 学校の基本コンセプト

- ① <生徒が主体的・自律的にいきいきと活動する学校>  
学習活動はもとより、生徒会活動や部活動などすべての教育活動において生徒が自発的に、意欲をもって全力で取り組める環境を提供する学校
- ② <地域に貢献し地域と共に発展する学校>  
地域の小・中学校との連携事業を継承・発展させるとともに、地域でのボランティア活動や伝統行事などに生徒が積極的に参画することを通して、地域の発展に貢献するなど、地域と共に歩む学校
- ③ <生徒の持つ可能性を引き出し、高める学校>  
生徒が成りたい自分を描きながら、夢や希望を持って学校生活を送れるよう、個の可能性を最大限に引き出し、その実現に向けて、一人一人を徹底的に大切にす学校  
(「基本方針」から抜粋)

### 3 教育課程や教育活動の具体化について

「京都市立新設高校創設プロジェクト」を中心に、大学や産業界、保護者の方が参画する「有識者会議」で意見をいただきながら「基本方針」に示された「目指す生徒像」と「学校の基本コンセプト」の具体化に向けた協議を進めてきた。

第3章以下は、これまでの約10ヶ月にわたる協議を現段階でとりまとめたものである。今後、学習指導要領の改訂や高大接続改革などの動向を見据えつつ、施設整備計画と歩調を合わせて本中間まとめの具体化を進めていく。

#### (1) 京都の都市特性を最大限に生かした教育活動の在り方

世界文化交流の中心として、全世界のひとびとが平和のうちに自由につどい、自由な文化交流を行う都市となることを宣言した「世界文化自由都市宣言」を都市の理想像として掲げる京都市には、1200年を超える歴史の中で磨き上げられた伝統と文化が、人々の衣食住や日々の生活に受け継がれ、多様な魅力と個性が輝き、それぞれの地域の暮らしに人々の絆がいきいきと息づいている。

今日、京都には日本国内のみならず世界各国からも観光や国際会議、学術研究などで訪れる人が増加しており、多様な文化的背景をもつ人々同志が触れ合う機会も増えている。このたび文化庁の京都への全面的な移転が決定されたが、こうした京都が有する魅力と国内外への影響力が評価された結果であり、日本文化の更なる振興・発信と「文化芸術立国・日本の実現」に寄与する京都の役割はますます大きくなっている。

また、世界有数の大学数を誇り、学生文化の息づく「大学のまち・学生のまち」でもあり、国内外の知が融合する大学の研究機関において、様々な分野で世界をリードする最先端の研究が行われている。さらに、「ものづくり都市」として伝統産業から先端技術産業に至るまでの多様な産業が集積しており、京都に本社を置き世界を舞台に活躍する企業が多数存在している。

こうした多様で奥深い都市特性を有する京都は、生徒が様々な分野の人との交流を通じて刺激を受ける機会に恵まれており、自らを見つめ、人として成長していくうえで絶好の学びの場であるといえる。新普通科系高校は、これまで塔南高校が積み重ねてきた教育実践を継承・発展させるとともに、京都という都市の強みを最大限に生かし、人文社会、自然科学の分野を問わず、将来社会の発展に失敗を恐れず果敢にチャレンジする意欲と行動力を育む教育を推進する。

## (2) 魅力あふれる教育課程の編成と授業の在り方

生徒の夢の実現に向け、キャリア発達を力強く支援できる学校として、基礎学力の確実な定着を図るとともに、言語技術の習得を基盤としてコミュニケーション力や実行力などの社会人基礎力<sup>※1</sup>を高めることに主眼を置いた教育課程を編成する。その際、「総合的な学習の時間」を教育課程の核として、他者と協働し解決策を考え実行する力を育成するため、身近な「地域」課題の解決をテーマとした文理の枠にとらわれない探究活動を行う。

また、企業や大学などでのインターンシップを通して、最先端の科学技術の知見やグローバルイノベーション活動の一端、また、ベンチャー精神や起業家マインドにふれ、学習と自分の将来を結びつける視野を広げるとともに、社会における課題や現象の多くが様々な分野が複合的に関連しながら生じていることを気付かせる。

あわせて、教科においては「総合的な学習の時間」での学習内容と関連付けた授業を展開し、生徒の学びたいという意欲を引き出しながら、能動的に学習に取り組めるよう、すべての教科でアクティブ・ラーニング<sup>※2</sup>を取り入れるとともに、生徒の興味関心に応じた学習テーマで授業づくりが行われるような環境を整える。

さらに、京都が誇る悠久の歴史と伝統が育んだ文化や芸術に触れ、自国文化に対する理解と誇りを高めるとともに、相互に留学生を受入れる姉妹校提携等による国際交流プログラムの実施を検討し、異なる歴史や文化を持つ他者と協働する力や国際的な教養を養う取組を進める。

※1 社会人基礎力 … 組織や地域社会の中で多様な人々とともに仕事を行っていく上で必要な基礎的な能力で、「前に踏み出す力」「考え抜く力」「チームで働く力」の3つの能力から構成される。(経済産業省が提唱)

※2 アクティブ・ラーニング … 教員による一方向的な講義形式の教育とは異なり、学習者の能動的な学習への参加を取り入れた教授・学習法の総称。学習者が能動的に学習することによって、認知的、倫理的、社会的能力、教養、知識、経験を含めた汎用的能力の育成を図る。

## (3) 生徒の主体性を引き出す教育活動の在り方

生徒が自立して社会生活を営んでいくうえで基盤となる、物事に対して自発的に取り組む主体的な態度や能力を育む教育活動を展開するため、海外研修や学校説明会等の学校行事において、生徒が委員会活動やボランティア活動として、行事の企画・立案から、運営までを行える枠組みを構築する。

部活動においても、生徒が活動計画や活動内容等を可能な限りマネジメントできる仕組みの構築や、学期毎に登録できる部活動や課外活動を

設置するなどの工夫を行い、様々なスポーツや文化活動等を幅広く経験しながら、生徒が自らの可能性に気付き、その可能性を高められるよう多様な教育活動を展開する。

#### **(4) 小・中学校等や地域と連携した教育活動の在り方**

地域清掃，防犯・防災等のボランティア活動や福祉施設との連携事業など，教育活動におけるダイバーシティ<sup>※3</sup>化を推進し，多様な他者との関わりを通して，協働する力を育成する活動を展開する。また，探究活動の成果などを積極的に発信し，高校生が地域において子どもと大人を繋ぐ役割を果たしながら，地域に様々な世代間の交流を創出する。

さらに，新普通科系高校が地域の生涯学習の拠点となるよう地域の人とともに学ぶ機会として，企業・大学から講師を招いた公開講座などを実施する。

こうした地域とともに歩む学校づくりを進めるため，学校・家庭・地域がともに学校運営について協議し，行動する「コミュニティ・スクール」導入の準備を進める。

※3 ダイバーシティ … 性別，年齢，国籍，障害の有無といった個人の属性にかかわらず，多様な人材の「違い」を尊重し，かつその「違い」に価値を見出し，能力や発想，価値観を融合する考え方。

#### **(5) チームとして協働する学校の在り方**

上述のような教育活動の推進にあたっては，教科や分掌の枠を越え，教育目標の実現に向けて全教職員が一丸となって取り組んでいくことが必要であり，卒業時までには生徒に身につけさせたい力を明確にするとともに，学年ごとに到達する指標を設定し，授業や指導のあり方をPDCAサイクルで改善につなげていく。

また，教職員のチームとしての力を高めるためチームビルディングや生徒の主体性を引き出すためのコーチングスキルに関する教職員研修を定期的実施する。あわせて，効率的・効果的な業務の遂行のため，ワーキンググループなど，分掌の枠を越えた仕事の組織づくりを行う。

さらに，地域や企業・大学の方々に継続的・安定的に教育活動を支援していただくため，専門のコーディネーターを核とする教育支援組織（サポートボード）を校内に設置し，高等学校コンソーシアム京都や大学コンソーシアム京都とも連携しながら，特色ある教育活動を支える仕組みを構築する。

## 4 施設・設備について

新普通科系高校においては、生徒の主体的な学びや特色ある教育活動に適した機能とともに、変化の激しい時代に応じて柔軟に部屋の形や用途の変容が可能となる自在性を備えたものとする必要がある。あわせて、「地域に開かれた学校」として地域連携や地域活動を担う学校施設の在り方や一部の施設の維持管理については、民間活力の導入も視野に入れて検討する必要がある。

### (1) 生徒が主体的・能動的に学びあう施設・設備

授業の在り方のみならず、施設面からも生徒の主体的・能動的な学習を促進し、生徒同士での議論の活性化につながる環境の整備を目指す。例えば、少人数での話し合いや発表が行いやすいなどアクティブ・ラーニングに適した教室のあり方やラーニングコモンズ<sup>※4</sup>の機能を充実させた図書館等の設置が望まれる。さらに、教室に限らず廊下などの開かれた空間で自由に議論が生まれるスペースの整備や、プレゼンテーションや交流行事などで活用できるホールの設置等が必要である。

また、生徒が探究活動や学校行事、部活動等に取り組む際、タブレット端末等の ICT 機器を積極的に活用し、必要な情報に素早くアクセスし、その情報を自ら活用、また他者と共有するための環境を構築するため、校内の Wi-Fi 環境をはじめとする充実した ICT 機器等を整備する。

※4 ラーニングコモンズ … 複数の生徒が集まって、電子情報や印刷物など様々な情報を用いて議論を進めていく学習スタイルを可能にする「場」を提供するもの。

### (2) 「魅せる高校」のための施設・設備

科学技術をはじめとする最先端の教育内容に対応できる特別教室や展示スペースを確保し、資料や標本を充実させ、地域の小・中学生等への開放や小・中学生と高校生とが共に実験や学習を行う。また、学習・部活動の合宿や海外からの留学生の受入れが可能となる宿泊機能を備えた研修施設のほか、全学年が参加可能な発表会・ポスターセッションなどが行える多機能型の施設を検討する。

グラウンドや体育館については、「するスポーツ」だけでなく、応援・観戦や地域スポーツの振興などの「観る・支えるスポーツ」を意識した施設・設備の整備が望まれる。

### **(3) 地域が輝く施設・設備**

地域に開かれ、地域の活性化や発展に寄与する拠点となるためには、連携事業において地域と交流するだけでなく、日常的に高校生と地域の方とが触れ合う機会の創出が必要である。このため、例えば雑誌・図書閲覧スペースやカフェテリア等、地域の方や近隣の小・中学生が気軽に利用できる施設の整備が必要である。

また、災害時における被災者の受入れや救援物資の備蓄、消防器具の保管などが可能な防災拠点としての機能を備えた施設・設備の整備が必要である。

## 5 学校規模・設置学科について

### (1) 学校規模について

平成28年度入学者選抜における塔南高校の募集定員は、京都市・乙訓地域での中学3年生の生徒数や普通科系高校の志願者の動向などを踏まえ、普通科6学級と教員養成系専門学科である教育みらい科1学級の合計7学級（280人）となっている。

新設高校においては普通科系の高校を想定しており、生徒の能力や個性を最大限に伸ばすための教育課程や部活動、生徒会活動等の活性化を考慮すると、現在の塔南高校と同程度の規模を確保することが望まれる。

### (2) 設置学科について

塔南高校においては、勉学と部活動の高いレベルでの両立を目指した「文武一貫」を教育方針とし、部活動時間の前後を活用し、進学や学習定着のための土曜補習や朝学習を実施し、学習習慣の定着と学習意欲の向上を図っているところである。

普通科では、こうした塔南高校のこれまでの取組の成果と課題を明らかにし、社会においてたくましく生き抜くための社会人基礎力を身につけさせる指導とともに、進路展望を高め主体的に学ぶ生徒を育む教育課程の構想を目指すことが重要となっている。

教員養成系専門学科である「教育みらい科」においては、入学生対象のアンケートにおいて、「教育みらい科」を選んだ理由として「教育みらい科の教育内容に興味を持ったから」が最も多く、「将来教師になりたいから」を上回っている。「教育みらい科」のすべての入学者が教員を志望しているわけではなく、教育内容そのものにも興味を持ち、専門科目を通して身につけた力が医療や福祉等の仕事に生かせると考えて入学した生徒も少なくない。

また、同じく卒業生へのアンケートによると、「教育みらい科」で実施している「教育課題探究」や「小学校現場実習」での学習や経験は、大学の推薦・AO入試や大学入学後のゼミ活動等においても非常に役立っているという意見が多く、卒業までの3年間で、生徒は自らの考えを言葉で伝える表現力や、課題解決のために集団で議論を進めるために必要なコミュニケーション能力を高めていることがうかがえる。

しかしながら、「教育みらい科」が1クラスの規模ということもあり、その先進的な取組内容が普通科全体に普及できていないなどの課題がある。

こうしたもと、今後、設置学科の検討にあたっては、「教育みらい科」の発展・見直しも含め、目指す生徒像の実現という観点から更に検討を進める。

## 参考資料 1

### 京都市立洛陽工業高校跡地における

#### 「新しい普通科系高校の創設に関する基本方針」

新しい普通科系高校（以下、新・普通科系高校）の創設に向け、下記の基本方針の下、教育内容や施設設備等の在り方について検討を進める。

#### 記

### 1 新・普通科系高校の創設に向けた考え方と方向性について

洛陽工業高校の跡地に関しては、平成28年4月の京都工学院高校の開校に伴い、平成29年度以降に活用が可能となる。平成26年8月に洛陽工業高校同窓会である洛陽京工会から「跡地の学校施設としての活用」要望が、また同年11月には塔南高校同窓会、愛校会、PTA、塔南高校の4団体から「立地、施設の老朽化や狭隘な状況等の課題解決に向け、洛陽工業高校跡地への移転」要望がそれぞれ教育長へ提出された。

塔南高校は、昭和38年、それまで普通科、工業科を併置していた洛陽高校及び伏見高校の普通科生徒を受入れる形で設立されたものであり、洛陽工業高校と非常に深い所縁があり、こうしたことを踏まえるとともに高校教育に対する市民の高いニーズに応えることができることから、洛陽工業高校の跡地に塔南高校を移転・再編し、新・普通科系高校を創設する。

### 2 目指す生徒像・学校の基本コンセプトについて

新・普通科系高校では、日本が目指す科学技術イノベーション立国の姿を見据えるとともに、塔南高校において教育界をはじめとする様々な分野で活躍する生徒を育ててきた教育風土をしっかりと引継ぎ、多様な分野で「社会に貢献する生徒の育成」を学校の最高目標とする。併せて、地域や企業、小・中学校と連携した教育実践や生徒の主体性や自律性を育ててきた教育風土を継承・発展させ、学校教育と実社会とのつながりを重視した教育活動を展開し、「国際的な視野を持って主体的に社会に参画し、自立して社会生活を営むために必要な力」の育成を目指した学校づくりを行う。

#### (1) 目指す生徒像

- ① 自らの将来像を描き、その到達に至る道筋と達成すべき課題を明確にして、目標の実現に向けチャレンジし続ける生徒
- ② 在校生はもとより、小・中学生や地域の方々等、世代や立場を超えた人々とも積極的に交流し、他者と協働して活動できる力を培い、多様な価値観や生き方を学びながら、自己の成長につなげることができる生徒
- ③ 国際化や情報化の進展する社会において、地域や社会の課題を多角的にとらえる視野を育み、科学技術分野や教育分野をはじめとする多様な分野で社会に貢献する気概を持って、社会的課題の解決や新しい価値の創造に向けて行動し、社会の発展に寄与することのできる生徒

## (2) 学校の基本コンセプト

### ① <生徒が主体的・自律的にいきいきと活動する学校>

学習活動はもとより、生徒会活動や部活動などすべての教育活動において生徒が自発的に、意欲をもって全力で取り組める環境を提供する学校

### ② <地域に貢献し地域と共に発展する学校>

地域の小・中学校との連携事業を継承・発展させるとともに、地域でのボランティア活動や伝統行事などに生徒が積極的に参画することを通して、地域の発展に貢献するなど、地域と共に歩む学校

### ③ <生徒の持つ可能性を引き出し、高める学校>

生徒が成りたい自分を描きながら、夢や希望を持って学校生活を送れるよう、個の可能性を最大限に引き出し、その実現に向けて、一人一人を徹底的に大切にす学校

## 3 教育構想の具体化について

今後、塔南高校の教職員、教育委員会及び中学校・高等学校長会で構成するプロジェクトを組織し、「目指す生徒像」の下に「学校の基本コンセプト」を具体化するため、次の観点を基に検討する。

なお、検討の過程において、適宜、有識者や保護者の方等から御意見をいただく。

### <検討の観点>

- ① 生徒が主体的・協働的に学習する授業への質的転換や高大接続改革など、国での教育改革の方向性を見据えた魅力あふれる教育課程の編成と授業の在り方、生徒会活動や部活動など生徒活動の在り方
- ② 小・中学校や地域団体をはじめ、地元企業や大学と連携した教育活動の在り方
- ③ 多様な分野において社会で貢献できる人材の育成に向け、生徒のキャリア発達を適切に支援し、多様な進路希望を実現する学校体制と指導の在り方
- ④ 新しい教育活動を展開するにふさわしい普通教室や特別教室、ICT 機器をはじめ、幅広い学習活動や部活動を展開するための施設・設備や学校規模の在り方

(平成27年6月4日 京都市教育委員会で議決)

参考資料 2

京都市立新設高校創設プロジェクト名簿

＜役職等は平成27年度末現在 敬称略＞

1. 有識者

氏 名	役 職 等
北川 進	京都大学物質－細胞統合システム拠点長 京都大学大学院工学研究科教授
溝上 慎一	京都大学高等教育研究開発推進センター 教授
武田 靖史	村田機械株式会社 取締役 業務支援本部 本部長
今野 圭子	中学校PTA代表 (京都市立中学校PTA連絡協議会庶務・近衛中学校PTA会長)
村上 久明	高校PTA代表 (京都市立高等学校PTA連絡協議会会長・西京高等学校PTA会長)

2. 「京都市立新設高校創設プロジェクト」委員

氏 名	役 職 等
古池 強志	京都市立塔南高等学校 校長
村上 英明	京都市立西京高等学校 校長 (京都市立高等学校長会代表)
田邊 美野利	京都市立七条中学校 校長 (京都市立中学校長会代表)
大黒 喜裕	京都市教育委員会 指導部 担当部長
三宅 慎一	同 指導部学校指導課 担当課長
川浪 重治	同 指導部学校指導課 首席指導主事
辰巳 敏秀	同 指導部学校指導課 課長補佐
末房 和真	同 指導部学校指導課 指導主事

※その他、オブザーバーとして、塔南高校の教職員が出席。

氏 名	役 職 等
沓谷 恭子	京都市立塔南高等学校 教頭
正木 廣樹	同 主幹教諭
黒澤 寛己	同 教諭
松田 尚久	同 教諭
飯島 弘一郎	同 教諭

### 参考資料3 検討経過

日 程	会 議	内 容
27年7月1日	第1回 プロジェクト会議	<ul style="list-style-type: none"> <li>・経過説明, 今後の予定説明</li> <li>・塔南高校の現状と課題の報告</li> <li>・「中間まとめ(案)」の方向性の確認</li> </ul>
7月28日	第2回 プロジェクト会議	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「中間まとめ(案)」の方向性検討</li> </ul>
	事務局	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「中間まとめ(案)」作成</li> </ul>
8月20日	第1回 有識者会議(公開)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・これまでの経過説明</li> <li>・「中間まとめ(案)」について意見交換</li> </ul>
9月14日	事務局・学校	<ul style="list-style-type: none"> <li>・唐橋自治連との意見交換</li> </ul>
10月23日	第3回 プロジェクト会議	<ul style="list-style-type: none"> <li>・有識者会議や地域等からの意見をふまえ「中間まとめ(案)」検討</li> <li>・「総合的な学習の時間」の在り方等について検討</li> </ul>
11月10日	第2回 有識者会議(公開)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・修正箇所の確認</li> <li>・「中間まとめ(案)」検討</li> </ul>
12月21日	第4回 プロジェクト会議	<ul style="list-style-type: none"> <li>・有識者会議での意見をふまえ「中間まとめ(案)」検討</li> </ul>
2月12日	事務局・学校	<ul style="list-style-type: none"> <li>・唐橋自治連との意見交換</li> </ul>
3月2日	第3回 有識者会議(公開)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「中間まとめ(案)」の最終検討</li> </ul>

## 参考資料4 プロジェクト（有識者会議）等での主な意見

### 1. 教育内容・教育活動等について

- 身近な社会である「京都」をキーワードに、地域での活動や伝統文化、企業活動などのテーマから生徒が選択し、地域や企業等と連携した探究活動を「総合的な学習の時間」を活用して実施する。
- 教科学習についても「京都」と結びつけたカリキュラム編成や教材作成を検討し、例えば「教育みらい科」も「京都ならではの教員を養成する」観点から見直してはどうか。
- 全ての教科・領域において、教科書で習う内容がいかに実社会に結びついているか、実感できるような取組ができないか。
- 「クエスト大学カナダ」では、1つの教室に5、6人用の演習室が6室併設されており、生徒は課題についてグループに分かれその演習室で議論や作業を行い、再び教室に戻って今度は他グループと議論を交わす等、議論中心の授業が展開されている。こうした自由闊達な議論を中心とした学習が重要。
- 授業中は教員が教えることは最小限にし、質問と議論を中心に行う。十分な対話が出るよう多くても25人程度の授業が良い。
- 普通科の生徒の絶対数は多いため、この層をいかに育てていくか。カリキュラムに多様性を持たせ「市民」をキーワードに「人間力」や「社会人力」の育成を重視したカリキュラムが必要。新校においてみらい科がどのように発展していくのかも重要。
- 教師に教えてもらうだけでなく、生徒同士で課題等について自ら考えるような機会を作ってほしい。生徒がそれぞれ自分の人生や、幸せとは何かについて、自ら考え、結論を出していくような機会も設け、「賢い市民」を育ててほしい。
- 「たくましく生きる力」を身に付けるため、定例的な学校行事だけでなく、頭だけでなく、「心」と「体」でも感じられるような様々な「体験」を生徒にさせてほしい。
- 一般的に、進学系のコースに所属していない生徒は自己肯定感が弱く、モチベーションもなかなか上がらない状態が見受けられることが多いため、進学系のコースでなくても、他のことで自信を持てるようなカリキュラム等を工夫することが必要。
- 高校段階で生徒に「これだけは誰にも負けない」という自信をつけさせてほしい。各個人が様々な経験を通じ、自分に自信を持っている人材は企業にとっても必要であり、新校の「目指す生徒像」は企業人にも合致する。
- 企業の職場で、従業員の仕事内容や職場の様子を観察する「ジョブシャドウイング」は、就業観や学習意欲の向上に繋がるものとして勉強になる。高校生ともなると、体験というよりも働く社員との交流のほうが有益であろう。

- 入学段階で生徒をAグループとBグループに振り分け、発表会や運動会等の校内行事はグループ間で競わせるなど、校内に競争原理を導入すると、生徒がやる気を持ち、様々なことに本気で取り組むようになるのではないかな。
- 単に語学力だけでなく、国際的な感覚を身につけ、率先して外国人とコミュニケーションをとれるようになってほしい。
- 海外から留学生を積極的に招いたり、海外の高校へ留学するよう促す教育ができれば良い。

## **2. 小中学校等や地域との連携について**

- 地域との連携を通じて「京都のことが大好き」で、京都の文化や歴史に誇りをもつ生徒を育成してほしい。海外では、まず自国や地域のことを聞かれる。自国や地域のことを学び、自ら語るができるようになることが重要。
- 昨今、特に京都は注目されており、外国の人と積極的にコミットする上で大きなアドバンテージである。京都は清水焼や西陣織といった伝統のものが受け継がれているだけでなく、他の文化にも寛容であり、知っていれば海外でも通用する。
- 全国的にみても大学の数が多い京都の地の利を活かし、講師を大学・産業界や地域から招き「地域教養科目」を設置できないか。地域住民が受講可能な市民講座のようなものができれば、地域との交流も生まれる。
- 地元である唐橋地域は、住宅街として人が集まる地域となっており、昔から教育に対して熱心である。各団体の団長や、町内会長をはじめ、新しい高校ができることを楽しみにしているといった前向きな意見が非常に多い。
- 唐橋のように、幼稚園（民営）と市立の小学校から高校まである学区は市内で他になく、地域の清掃活動にしてもすべての校種が参加してくれる。また、唐橋小6年生、洛陽工の生徒、地域の大人等が危険な場所を歩いて確認する取組も行っており、こうした地域の大人と子どもを繋ぐ役割を高校生に期待する。新校においても地域との取組は継続してほしい。
- 唐橋独自の伝統文化として、松尾大社の祭りで使う神輿を学区として有している。神輿の担ぎ手についても高校生に声かけをしているので、そうした伝統文化事業にも協力してほしい。
- 地域連携の一助にもなるため、福祉につながる部活動があっても良い。
- 南区には企業が多いため、地域の企業との連携も進めてほしい。

### 3. 学校体制等について

- 全国の参考になるような、京都らしい教員組織のあり方を検討してはどうか。京都は学者や文化人が多く在住している。また、今後、海外勤務の経験がある商社の方や、各分野で活躍した方々が数多く退職していくが、自分の経験を子どもたちに伝え、今後活かして行ってほしいと思っている方は多いはずである。こうした人材を活用することで、ローコスト・ハイクオリティな組織づくりを構築できないか。
- 外部人材を活用する際は、外部との調整だけでなく、何の目的で誰を呼ぶのか等といったマネジメントを行う「コーディネーター」が重要となる。

### 4. 施設等について

- 部活動等、まとまった活動をするには一定の学校規模が必要。規模が小さければ学校の活力にも影響してくるため、「1学年で6学級(240人)」ではなく、8学級程度で検討してはどうか。
- 小中学校にはない施設の整備や、現在洛陽工が行っているロボットに関する取組等、小中学生が新校に集うような工夫をしてほしい。
- 新校は災害時の帰宅困難者等が宿泊できるような施設を備えた「地域の防災拠点」の観点からも整備してほしい。
- 「地域に開かれた学校」となれば、不審者への対応も必要だが、普段から人の出入りがあるほうが、人の目があるため、不審者対策になる。一見学校に見えないくらいオープンな施設でも良い。

#### 参考資料5 洛陽工業高校と塔南高校の施設状況等

学校名	洛陽工業高校	塔南高校
所在地	南区唐橋大宮尻町22	南区吉祥院観音堂町41
開校年度	明治19年	昭和38年 ※洛陽高校・伏見高校(当時)の普通科生徒と新入生を受入れて開校
H28生徒数 ( )はH27	261名(418名) 学級数1年—(5)※ 2年5(6) 3年6(6) ※京都工学院高校開校により募集停止	796名(754名) 学級数1年7(7) 2年7(6) 3年6(6) (各学年1クラスが教育みらい科)
敷地面積	建物敷地 20,500㎡ 運動場 11,599㎡	建物敷地 9,340㎡ 第一グラウンド 7,402㎡ 第二グラウンド 7,566㎡
校舎延床面積	校舎面積 20,505㎡ 屋体面積 1,790㎡	校舎面積 6,053㎡ 屋体面積 1,680㎡
アクセス	JR西大路駅から徒歩約5分	JR西大路駅から徒歩約20分